



東京部会(第118回)

日時: 2020年7月25日(土) 15:00 - 17:00

場所: Zoomによるウェブ会議

参加者: 16名参加

今回は杉田孝之先生(千葉県立津田沼高等学校)の司会でウェブ会議を行った。

(1) 新井から「70歳、中学生に経済を教える、その後」の報告があった。

- ・これは、前回の報告の続きで、4月から筑波大学附属中学の非常勤講師を依頼された新井の実践報告である。
- ・今回は、前回の報告後によせられた四つの質問、「生徒がどこまで理解すると、新井が設定した目標に近づくのか?」「最初に登場した概念はこれからの学習のどこに登場するのか?」「市場機構のモデルと現実の経済社会の乖離をどのように説明するのか?」「需給曲線をタテに読むためのうまい事例があるか?」に答えるための、市場の限界をテーマとしたプリントと確認テスト(中間考査)の問題を通して、その質問に回答を加えながら補足の説明が行なわれた。
- ・四つの質問に関して、最初の二つに関しては、完全競争の世界を理解することで現実の経済現象の基準が与えられ、そこから同心円状に不完全競争の世界、市場の失敗、現実の世界とひろがり、その理解を踏まえて政策選択ができる生徒を作る準備できるのではないかという回答があった。また、三番目のモデルと現実との乖離に関しては、不完全競争以降の世界の価格現象の理由を考えさせる課題を通して、その乖離と理由を実感させることができるという回答があった。最後のタテに読む事例は、ペットボトルの価格決定の教室実験の結果をグラフ化させることで理解させようとしたが、それは中学生には難しいという回答があった。
- ・また、新井の方法は、社会科教育の世界でいえば、系統学習派であり、問題解決のためには、課題に切り込むための道具が必要だと考えるのでこのような授業を行なっているとの説明も加えられた。
- ・検討では、今回の授業での生徒の反応にあった「不完全競争を完全にしたい」というのは、完全競争が良いものという誘導になってしまわないか、「ネットの普及で完全競争に近くなるのでは」という部分は注目に値するのでは」などの意見が出された。

(2) 新井から、大阪部会の様子の報告があった。

- ・松井克之先生(西九州大学)による、歴史分野と最新のコロナをきっかけとした聖武天皇と大仏建立を巡る河原授業の分析が紹介された。
- ・そこでの討論で、河原和之先生の授業づくりの秘密の一端(ネタや問いの背景にはねらいがはっきりあり、そこに生徒を誘導する系統型の授業づくりをおこなっている)が、ご自身から発言されたとの報告があった。

(3) 篠原代表から前回の報告に関する質問への回答と新井授業のコメントがあった。

- ・質問は、前回の篠原先生のレクチャーの内容に関する質問であり、回答が行なわれた。
- ・新井授業に対するコメントでは以下の点が指摘された。



- ①新井の授業は経済学を教えるにかかるといえるものであり、これはこれで成り立つが1980年代までの古い方法であり、生徒が世の中を理解するための教育という点ではもっと別の教え方を追究した方がよいのではという指摘である。
- ②政策選択に際しては機会費用の理解が必要であるという指摘はその通りで、政策評価の要になる概念である。
- ③①と関連するが、中高生に需給曲線やタテに読み余剰を教えるのはやめた方がよい。需給曲線の場面で登場するのはリンゴやみかんなどの一つの市場だけでそれも部分均衡の世界である。それも導くためには前提条件が多すぎる。シフトの事例なども一つの変化だけに注目するだけで、その裏で何が起きているかまで視野にいれたものではない。その意味では、様々な市場における様々な価格決定の連鎖を産業単位でまとめて紹介するなどの方法をとる方が、生徒の仕組み理解に通じるのではという指摘であった。

(篠原総一:部会での私のコメントの主旨は、「経済学の理論はかなり厳しい仮定(前提条件)の下で導かれているので、単純な理論のままでは経済問題を切って見せることが難しいケースが多い」ことを指摘することでした。経済教育ネットワークでは、今後、意識して、中高の教員とエコノミストが共同で、経済教育での経済学の使い方について検討していくことにしています。)

(4)ここまでの報告を踏まえた意見交換が行なわれた。主な内容は以下の通りである。

- ・具体的事例から経済を教える事例の紹介では、経済にあまり知識をもっていない大学生向けの経済学の講義の様子(インバウンドの経済学)が紹介され、受講学生によってケースバイケースでどこまで教えるかを考えて講義をしているとの報告があった。
- ・生徒によって教える方法や内容が変わるとのではという点では、系統学習や問題解決型の学習の方法以前に、生徒にとって切実な問題、生きるための切実な問題(例えば給料はどうやってきまるの?など)を提示しないと学習が自分のものにならないという指摘もあった。生徒にとって切実な問題は、生徒自身から出させることが必要で、それを出させるための準備作業(生徒との関係づくり)に一学期は力を注いでいるという報告であった。
- ・報告された実践を一般の中学生にどこまで教えることができるかと言う点では、直接教えなくともその意識をもって教員のスキルアップをしていかないと、「民度」の底上げにはならないのではという発言もあった。
- ・授業の、内容と方法、目標に関するテーマでは、その三つはリンクしてなければいけないはずで、今回は方法に関しては問題になっていないが、内容と目標に関してはさらにきちんと押えて行く必要があるのではという指摘があった。
- ・また、経済の考え方として、市場を教える際には「他の条件が一定」で作られたモデルであることを教える側がしっかりつかんでいることが大事ではないかとの指摘もされた。

(5)まとめ

- ・今回も新しい授業提案は出されなかったが、目の前の生徒へどのような授業を行なうのかという実践的な課題を通して新しい経済教育の内容、方法、目標をさらに追究する必要があるという共通理解で部会を終了した。

(以上、記録と文責:新井)



経済教育ネットワーク
Network for Economic Education



テスト問題
(新テストなど)

中学

高校

指導案

新聞教材 (NI
E)

次回開催予定：2020年9月5日(土)時間：15時00分～17時00分、ネット会議

議題：「非対面授業の実践とそれをこれからどう生かすか、および授業提案」(仮題)